# オーディオブック『地層の声、星図の言葉』

## はじめに

台湾という土地は、数百年にわたって異なる政権と文化の衝撃を受け続け、それぞれの時代が深い地層のように積み重なってきた。その変遷の中で最も敏感かつ根本的な問題として常に浮かび上がってきたのが、「言語」という問題である。日本語、台湾語（閩南語）、客家語、原住民の諸言語、そして戦後の北京語——時代が移るたびに「国語」の定義が塗り替えられ、それまで人々が大切にしてきた言葉が周縁へと追いやられてきた。

言語とは単なるコミュニケーションの手段ではない。それは記憶であり、文化であり、個人のアイデンティティそのものである。ある言語が公的な場から排除されるとき、その言語を母語とする人々のアイデンティティもまた、静かに傷つけられていく。台湾の歴史はその繰り返しであり、この島に生きた作家たちは、時代ごとに異なる形の沈黙と抑圧を経験してきた。

本作品『語春』は、そうした複数の政権交代を生き抜いた一人の女性の目を通して、言語とアイデンティティの複雑な関係を描くオーディオブックである。単なる歴史の再現ではなく、日常の中に積み重なるさりげない出来事——校内誌への投稿、原稿の差し戻し、受付での一言——を通じて、時代の圧力がいかに個人の内面に食い込んでいくかを描こうとした

## 一、制作動機

この作品を制作するきっかけは、台湾文学史を学ぶ授業の中での一つの気づきにあった。台湾文学史を概観するとき、そこには「空白」と呼ぶしかない時期が幾度か存在する。日本統治期には日本語での創作が奨励・強制され、戦後の国民政府期には台湾語・日本語での執筆が制限され、作家たちは突如として新しい「国語」で書くことを求められた。この繰り返される言語的断絶の中で、多くの作家が沈黙を余儀なくされ、あるいは創作の場から姿を消していった。

しかし同時に、そうした時代にあっても書き続けた人々がいたことを知った。楊千鶴、葉石濤、賴和——彼らは制約の中でもペンを手放さず、さまざまな形で台湾という土地の声を残そうとした。

さらに深く調べていくうちに、戒厳令期（1949～1987 年）という長い沈黙の時代に気づいた。38 年にもわたるこの期間、言論の自由は厳しく制限され、政治的に敏感な表現は検閲や弾圧の対象となった。それでも地下出版や暗号的な文章を通じて、言葉を伝えようとした人たちがいた。「声は封じられても、言葉は自ら道を見つける」というこの作品の核心にある思想は、まさにそうした人々の生き方から生まれたものである。

加えて、今の台湾においても言語をめぐる議論は続いている。台湾語や客家語の教育保護、原住民族言語の復興——これらは現在進行形の問題である。過去の作家たちが経験した言語的な葛藤は、決して遠い昔話ではなく、現代の台湾社会にもつながる問いを内包している。そのことを、オーディオブッ

クというメディアを通じて、より多くの人に感じてもらいたいと考えた。

## 二、物語の背景と制作上の工夫

### （一）使用楽曲と時代背景

物語は日本統治期から戦後の戒厳令時代にまたがる長い時間軸を持っており、各時代の雰囲気を音で伝えるため、場面に応じた楽曲や音声資料を意図的に挿入した。聴者が耳からも時代の空気を感じられるよう、音景（サウンドスケープ）の設計にも力を入れた。

【日本統治期・雨夜花】1933 年に発表された台湾の民謡〈雨夜花〉を使用した。この曲は日本統治期に台湾人の間で広く愛唱された楽曲である。同時に、その哀愁を帯びた旋律と歌詞は、言語の制約という嵐の中でも折れずに咲き続けようとする語春の姿と重なる。

【1945 年・蔣介石の抗戦勝利宣言】戦後、国民政府が台湾に来た場面では、蔣介石総統による抗日戦争勝利宣言の放送音声を挿入した。この音声は、旧秩序の終焉と新たな政権の到来を直接的に告げる歴史的資料であり、語春の人生における第二の大きな転換点の始まりを象徴している。

### （二）アニメーションの意象と隠喩

本作品はオーディオブックでありながら、映像的な演出も取り入れた。各場面に込めた意象と隠喩について説明する。

【複数言語が混在する手紙】アニメーションの中に、台湾語・日本語・漢字・ローマ字（白話字）が入り混じった一通の手紙が登場する。これは物語の「鍵」となる道具立てであり、語春がこの手紙を目にしたことで劉裕が最後に残した暗号のような伝言を思い出し、記憶が過去へと引き戻されていく構成になっている。

【赤い画面と逆再生のラジオ雑音】この組み合わせは、時間が日清戦争後——台湾が日本に割譲された時代まで——巻き戻ることを示す強い視覚的・聴覚的シグナルである。赤という色が持つ緊張感と、ラジオ雑音の逆再生が生み出す不安感によって、歴史の重さを帯びた衝撃を与え、聴者・視聴者を重厚な歴史的記憶の入り口へと誘う。

【センダンの花（苦楝花）】物語の随所に登場するセンダンの花は、単なる景物描写ではなく、語春の運命を暗示する重要な象徴として機能している。苦楝花という名前が示す通り、「苦しみの中に咲く美しさ」を体現する花であり、幾重もの言語的制約に苦しめられながらも、最終的に誰の制約も受けずに自らの物語を自由に書けるようになる語春の軌跡と重なる。

## （三）主人公の文化的変換的変遷と生活様式

語春は、日本統治期から戦後の国民政府統治期という二つの大きな時代を生き抜いた女性作家である。彼女の人生は大きく三つの段階に分けて描かれており、それぞれの段階で異なる形の言語的・文化的葛藤が描かれている。

【第一段階・日本統治期の学生時代】

語春は台北州立第一高等女学校（一高女）に通っている。これは当時台湾で最高水準の女子教育機関であり、主に日本人女学生が通い、台湾人の入学者は極めて少なかった。語春の親友・蘭蘭は、主に台湾人を受け入れる第三高等女学校（三高女）に在籍しており、二つの学校の間にある見えない壁が、物語の中で繰り返し浮かび上がる。この時期の語春は、生け花の授業での出来事や校内誌への投稿を通じて、民族と言語に関わる不公正を少しずつ意識していく。特に孝女白琴に関する反論記事の投稿は、彼女が「書くことで世界に向き合う」という姿勢を持ち始める重要な転換点となる。

【第二段階・戦後初期の記者時代】

卒業後、語春は新聞社に就職し始める。政権交代後、台湾の社会は急激に変化し、「国語」が日本語から北京語へと塗り替えられた。語春の原稿は次第に差し戻される回数が増え、ついには台湾語での投稿そのものを拒絶される。受付の女性に「中国語で話してください」と言われた瞬間の描写は、言語政策の暴力が個人の日常にどれほど深く食い込むかを象徴的に示している。この段階で語春は、書くことへの情熱と社会的制約の間で深刻な葛藤を経験する。

【第三段階・戒厳令期の地下執筆】

「橋」副刊が廃刊となり劉裕が拘束されたのち、語春は三度目の沈黙を強いられる。しかし彼女はペンを手放さなかった。ある日、郵便受けに差し込まれた一冊の見知らぬ本の中に、特定の文字に小さな記号が付けられていることに気づく。その記号をたどると「声は閉じ込めることができても、言葉

は自ら道を見つける」というメッセージが浮かび上がった。この暗号のような伝言が、長い抑圧の年月を生き抜く語春の精神的支柱となる。

## 三、制作における調査

### （一）歴史的背景の調査

物語の歴史的整合性を確保するため、執筆に先立って幅広い資料調査を行った。日本統治期については、当時の校舎の建築様式・教育制度・国民教育政策の具体的内容、そして台湾本島人の就学環境の実態——特に一高女と三高女の入学者層の違い——について調べた。これにより、語春と蘭蘭が異なる学校に通うという設定に歴史的根拠を持たせることができた。

また、日本統治期の台湾人作家の経験については、楊千鶴の著作・インタビュー記録を中心に参照した。語春が校内誌に投稿する場面は、楊千鶴が学生時代に実際に記事を執筆した経験を参考にしている。彼女が書いたとされる〈哭婆〉という記事は残念ながらネット上では文献が見当たらず、関連資料をもとに内容を合理的に推定するしかなかった。

### （二）戦後台湾の文学的変容と歴史事件の調査

国民政府の台湾移転後における文学状況については、言語政策の転換が作家に与えた具体的な影響、「橋」副刊の創刊の経緯と約半年での廃刊に至る過程、外省人作家と本省人作家の間の文化的摩擦や、二・二八事件後の白色テロとその文学への影響などを調査した。

物語後半に登場する「橋」副刊は、実際に 1947 年に『新生報』に設けられ

た文芸副刊「橋」を原型としている。この副刊は、戦後台湾に流入した外省人作家と、日本統治期から創作を続けてきた本省人作家との間に文化的な橋を架けようとした試みであった。日本語でも台湾語でも構わないという方針を掲げ、翻訳を介してでも双方の声を届けようとしたこの副刊は、当時の台湾文学にとって希少な実験の場であった。しかし約半年で廃刊となり、関係者の一部は逮捕・拘束されるに至った。

物語中のいくつかの台詞や描写は、この調査から直接生まれたものである。「舌を切り取られたようだ」という比喩表現、「政治に触れない仙侠・恋愛小説しか書けない」という状況の描写、「どの言葉がこの場所に残っていいのか分からない」という語春の内面の言葉——これらはすべて、文献調査で見つかった当時の作家や知識人の実際の語りや証言に基づいている。史実に基づいた感情表現として、できる限り実態に即した表現を心がけた。

### （三）朗読練習と録音

オーディオブックとしての質を確保するため、録音に先立って大量の朗読練習を積んだ。本作品は日本語・台湾語・北京語の三言語が入り混じる構成であるため、各言語の発音確認は不可欠であった。特に台湾語の部分については、発音の正確さのみならず、声調（声調符号）の自然な表現にも注意を払った。

また、単なる正確な発音にとどまらず、各場面の感情表現と語気の設計にも時間を費やした。それぞれの場面が持つ感情を、声の質・速度・音楽・間によって伝えることを意識した。

## 四、制作における困難

今回の制作において最初に直面した困難は、作業量の膨大さであった。物語のテキストは約一万字に及び、それを執筆するだけでも相当の時間と労力を要した。さらに、オーディオブックとして仕上げるための朗読練習・録音・音声編集、そして映像部分のアニメーション制作と字幕調整が加わり、全体の制作期間は通常の作品の約二倍に達した。

史料不足という問題にも繰り返し直面した。楊千鶴の〈哭婆〉に関する記事はその代表例であるが、それ以外にも、当時の一高女の具体的な日常の様子、台湾語で書かれた当時の投稿文の文体、「橋」副刊の茶会での議論の雰囲気など、文献として確認できない部分が少なくなかった。こうした場合は複数の周辺資料から状況を推定し、歴史的事実と矛盾しない範囲で創作的に補完するという方法をとった。

技術的な面でも多くの課題があった。動画編集ソフトの操作はほぼ未経験の状態から始めており、字幕のタイミング調整、フェードイン・フェードアウトの設定、アニメーション効果の実装など、基本的な操作から習得する必要があった。特に複数言語が混在する字幕の表示は、フォントや文字コードの問題も絡んで予想以上に手間がかかった。

また、台湾語部分の朗読は、自身の台湾語の運用能力の限界ともぶつかる作業であった。声調が不自然にならないよう何度も録り直しを行い、ネイティブスピーカーに確認してもらいながら調整を重ねた。この過程は苦労を伴うものであったが、同時に台湾語という言語そのものへの理解と愛着を深め

る貴重な経験にもなった。

## 五、AI 利用について

本制作では、画像生成・音声変換・文章校正の三つの場面で AI ツールを活用した。

画像生成については、物語の各場面に登場するイラストの制作に AI を用いた。登場人物の外見や時代背景・服装などの条件を細かく指定してプロンプトを作成し、出力された画像の中から物語の雰囲気に合うものを選んだ。一度の出力で理想通りの結果が得られることは少なく、「日本統治期の台湾の女学生、白いセーラー服、センダンの花の背景」のように条件を細かく調整しながら繰り返し生成した。最終的に使用する画像は、物語の文脈と矛盾がないかを必ず自身で確認した上で採用した。

音声変換については、テキストから音声を生成する AI ツールを用いて朗読音源を作成した。声の質・話速・感情表現などのパラメータを調整しながら、各場面の雰囲気に合った音声に近づけていった。特に台湾語・日本語・北京語が混在する場面では、言語ごとに設定を変えながら自然な切り替えになるよう工夫した。

日本語文法の校正については、Claude（Anthropic）を活用した。自身が書いた文章を入力し、不自然な表現や助詞の誤りを指摘してもらいながら修正を重ねた。ただし AI の提案をそのまま採用するのではなく、「なぜその表現が自然なのか」を確認しながら修正することで、単なる校正にとどまらず自身の日本語表現力の向上にもつなげた。

いずれの場面においても、AI はあくまで補助的な道具として位置づけ、最終的な判断と選択は常に自身が行った。

## 結語

この制作を通じて、台湾文学の歴史的文脈とその重層的な変遷について、これまでよりはるかに深く理解することができた。言語政策という外部からの圧力が、いかに個人の創作と内面に食い込み、しかしそれでも書き続けることを選んだ人々がいたという事実は、今も私の中に重く、しかし確かな感動として残っている。

語春という主人公を通じて描こうとしたのは、一人の英雄的な抵抗の物語ではない。日常の中で静かに揺れながら、それでも書くことをやめなかった、名もなき多くの作家・書き手たちへの敬意である。「どの言葉がこの場所に残っていいのか分からない」という語春の内面の言葉は、当時を生きた無数の人々が感じていた疑問そのものだと思う。

台湾文学館が編んだ『文青養成指南』の末尾にあるように、台湾文学史は私たちが立つための大地の地層であり、同時に未来への道を照らす星図でもある。過去の作家たちが残した言葉は、単なる歴史の記録ではなく、今を生きる私たちが自分のアイデンティティを問い直す際の鏡でもある。

時は流れ続け、作家たちは今もペンを走らせている。台湾文学史の新たな一章は、私たちの世代によって書き継がれていく。この作品が、そのほんの小さな一石となれれば幸いである。

# 參考文獻


一、書籍

台灣文學館（出版年不詳）。《文青養成指南》。臺南：國立臺灣文學館。

二、期刊論文

賴俊諺（2020）。台灣日治時期台灣公學校校園景觀形成。《師大文學報》，13，185–220。

三、網路資料

國立臺灣文學館（無日期）。臺灣新生報「橋副刊」資料庫。取自 https://db.nmtl.gov.tw/site2/ikm?id=346

四、影音資料（YouTube）

台灣演藝（無日期）。228 相關影片。YouTube。取自 https://www.youtube.com/watch?v=ZNe3lnQYjKY

Taiwan Bar（無日期）。是貴是賤？ka˝ng 逼抑是被逼？戰後台灣「外省人」ê 悲歡世界。YouTube。取自 https://www.youtube.com/watch?v=FwqF2yhs1kY

志祺七七（無日期）。替人流淚的職業！你聽過孝女白琴嗎？台灣「哭喪」傳統，對現代人還有意義嗎？YouTube。取自 https://www.youtube.com/watch?v=Vfru-Ac5skA&t=76s